

# 「行書ノート」を活用した行書の指導

——「話し合い・考える」書写の学習（一年）

新しい指導を考える会

## 1 実践の趣旨

生徒の日常の様子を見てみると、自分が書いた物を判読できなかつたり、人に正しく伝えられなかつたりすることがある。これは、自己流で文字を続けて書いていることに原因の多くがある。例えば、「マ」と書くこと、「さんずい」と書いたつもりでも「こんべん」に見えてしまう。行書が自己流の続け文字にならないよう、だれにでも確実に読める正しい行書を書く力を身につける必要がある。学習指導要領における言語事項としての書写指導の目標の一つも、ここにあると考える。

読み間違いを防ぐため、多くの人々が文字を速書きするうちに、点画の組み合わせごとに一定の決まりが生まれてきた。この決まりを、わたしは「行書の法則」と呼ぶ。この法則を知識として獲得し、日常生活のあらゆる場で正しく利用すれば、文字を速く書くことができ、読み間違えることもなくなる。社会に巣立つ前に、こうした力を生徒一人ひとりが確実に身につけることが、中学校で行書を学習する目的である。

ためには、生徒自らが話し合い、自分の頭で考える活動が有効である。その結果、学習内容を教材以外のほかの文字へも転用しやすくなる。また、限られた時間の中で効率よく学習を進めることにもなる。

## (2) 「行書ノート」の活用

B4判用紙の右側に行書の法則を中心に記録し、左側には学習した法則の内容を書く。活用方法は、第一時では右側に楷書と比較した正しい行書の法則、間違った書き方を書く。また、左側には教材以外の文字でその法則が利用できるよう、小筆や硬筆で書く。第二時ではその法則と関連・類似する文字の行書の法則を考えたり、多くの文字に使用したりする。

## (3) 指導計画（指導の手順）

一つの教材を二時間で指導することを基本とする。

第二次 (教材と関連・連鎖・類似する文字で)	第一次 (教材で)
<b>法則の発見</b> ・書き方をいろいろ考える。 ・発表する。 ・確認する。	<b>法則の発見</b> ・試書する。 ・発表する。 ・話し合う。 ・発見する。
↓	↓
<b>法則の利用</b> ・書き方をいろいろ考える。 ・発表する。 ・話し合い、発見する。	<b>法則の利用</b> ・法則のある文字を書く。 ・利用できる文字を探して書く。
↓	↓
まとめ	まとめ

## 2 実践にあたって

従来の書写授業のように、一文字ずつ行書を習得するのではなく、一つの教材からより多くの文字を正しい行書で書くことができる力を養えるよう、学習方法を改善することが大切であると考える。そのため、学習過程において生徒自らが「行書の法則」を発見し、さらに、その法則に関連・類似する法則を系統立てた学習を「話し合い・考える」活動を取り入れながら行うことで、多くの文字を正しい行書で書く力がより身につくと考えた。法則の発見と利用には、「行書ノート」を用いた。以上のような考えから次のような仮説を立て、授業実践を通して研究した。

〈仮説〉

次の二点をふまえた「行書ノート」を活用すれば、行書が日常に生きて働く力を育てることができる。

- ① 行書の特徴である点画の連続・省略の法則を発見し、利用する。
- ② 発見した法則と関連・類似する文字の行書の法則を考え、利用する。

## 3 基本の指導型

### (1) 「話し合い・考える」ことの意義

書写学習において、「話し合い・考える」活動はあまり取り入れられていない。しかし、学習活動を理解し、より定着させる

◆ 左の文字を法則に注意して小筆で書こう。

材	校
枝	松
新	村
杉	橋
柱	根
机	欄
禁	検

◆ 法則が使われている文字を探して硬筆で書こう。

横	横
桜	桜
枚	枚
模	模
箱	箱
親	親

楷書	法則	教材
才	才	松林
まちがった書き方		
才	才	才
硬筆で法則の練習をしよう。		
本	本	本
才	才	才

木偏の点画の省略

▲行書ノート

書写学習の中で話し合いを重視し、生徒自らが行書の法則を考える活動を取り入れたことで、「手」ではなく「頭」で法則を正しく理解し、定着させた。日常生活の中で法則を利用しよう

4 成果と課題

**目標【2】** 発見した法則を多くの文字に利用する。  
**結果** 三十九人中三十五人が法則を正しく利用できたのは、目標【1】で点画が省略される理由を確実に理解したためである。また、生徒たちが法則が利用できる文字を探し学習方法に慣れたこともある。

**目標【1】** 偏部の省略の法則を発見し、関連・類似する法則を「行書ノート」に書く。  
**結果** 自分で法則を考える試書では、「イ」のように考えた生徒が多かった。これは前時の木偏の点画の省略から類推した結果である。ところが、この書き方では「ニ」を書いてから縦画を書かねばならず、つくりへ連続しない。こう考えた生徒は、なぜ木偏は四面めが省略され、「イ」のように書くのか理解していない。

話し合いで、偏の最終画が省略されるのを理解した。そのため筆順が楷書とは変わることにより生徒全員が気づき、正しい法則を「行書ノート」に記録できた。

(5) 考察

**目標【1】** 偏部の省略の法則を発見し、関連・類似する法則を「行書ノート」に書く。

という意欲の高まりも見られ、正確に利用している。「行書ノート」の活用が、日常に生きて働く行書の力が身につくという「仮説」が立証された。

なお、小筆を使用する理由は、①大筆では「行書ノート」が書きにくい、②小筆と硬筆の持ち方は同じであり、硬毛の関連を図りやすい、の二点からである。

また、この学習では字形にはあえて触れていない。これは、法則を正しく理解し、利用することを目的としているためである。正しく書けるようになったあと、生徒は字形（正整）に思いを致すようになると考えるからである。




授業では、「なぜ？ どうして？ どうなっているんだろう？」という疑問、それを解決するための思考・話し合い・工夫などの活動が学習意欲を高め、学習内容を深めていくものである。本授業は、行書ノートを用い、行書の法則の発見とその転用などを、話し合いや発表という形式を通して、自分のこととしてとらえさせる点において価値ある授業になっている。行書の法則を自ら発見した生徒たちは、行書と向き合う楽しさを手に入れたに違いない。

書写の授業は、ひたすら手本通りに書くというパターン化した展開になりやすく、教師も生徒もまったく疑うことなく書写の授業とはそのよなものだとして過ごすケースが多い。しかし、本授業は、教師の生徒への熱い思いと工夫によって、書写の授業はさまざまな学習活動が可能であり、成果が得られることを示している。 (M)

(4) 本時の学習

- ① 題字 「社」など(木偏の点画の省略からの類推) ※一年生39名対象
- ② 本時の目標 【1】 偏部の省略の法則を発見し、「行書ノート」に書く。  
 【2】 発見した法則を他の多くの文字に利用する。

③ 学習活動の概要

学習活動	教師の発問と生徒の反応	指導上の留意点及び評価
<b>関連・類似の法則の発見(目標【1】)</b> (1) 自分で法則をいろいろ考えて「行書ノート」に試書する。 (2) 自分で考えた法則から正しいと思う法則を選ぶ。 (3) 正しいと思う法則を発表する。 (4) 発表した法則について話し合う。	教師: 「木」は行書でどう書くか、法則を考えて「行書ノート」に小筆で書かせる。 生徒が書いた行書例  教師: 正しいと思う法則に○印をつけさせる。生徒が選んだ法則が正しいと思う理由を聞く。 (発言例) 生徒A: 「木」の楷書の筆順は「一」→「フ」→「ナ」→「ト」だが、「木」の筆順は「一」→「ナ」になっているから違うと思う。 教師: 「木」が正しいかどうか、ほかの生徒たちにも理由とともに発言させる。 生徒B: 「木」は文字として読みづらい。 生徒C: 「木」は速く書けるから正しいと思う。 生徒D: 「木」は偏からつくりへ速く続くように「ナ」と書いた。だから「木」も同じように書くと思う。楷書と筆順が変わって「一」→「ナ」→「ト」と書かなければ、偏からつくりへ続かないと思う。 (「木」の点画の省略の法則と関連した発表が続く。)	○行書の基本である速書きから法則を考えている。 ○さまざまな書き方を考えている。 ○法則が正しいと思う理由を考えている。 ○感覚的でなく、論理的に考えている。 ←発表から生徒の考えを把握する。 ○自分の考えを論理的に発表している。
<b>法則の利用(目標【2】)</b> (1) 法則の利用できる文字を探して「行書ノート」に硬筆で書く。 (2) 「行書ノート」に書いた法則の利用できる文字を発表する。	教師: 「木」の正しい法則を確認させる。法則の利用できる文字を探して、「行書ノート」に硬筆で書かせる。 生徒: 「神」「社」「祝」「祖」「祐」「祥」「福」など、「木」の文字を書く。 教師: 探した文字を、10人ほどの生徒に黒板に書いて発表させる。	←さまざまな古筆を見せ、正しい法則を確認させる。 ←文字が探せない生徒には、書写以外の教科書などから探させる。 ○正確に法則を理解して板書している。